

2024年6月16日

「感謝を持って神に仕える」

ヘブライ人への手紙 12:18-29

早川 真牧師

モーセは神から十戒という十の戒めを受けるためにシナイ山に登りました。この時、燃える火、黒雲、暗闇、暴風、ラッパの音がイスラエルの民を恐れさせました。それはモーセをもおびえさせるほど恐ろしいものでした。しかし、ヘブライ人への手紙の著者は、かつて神に近づいた彼らはそのような恐ろしい目にあっただが、私たちはそうではないということを説明しています。

私たちと神との新しい契約のために、イエス・キリストが仲介者となってくださってご自身の血が流されました。ユダヤ人は神に対する自らの罪の赦しのため、律法によって犠牲の動物の血を流し、そのことによって神の前に罪の赦しを得ていました。しかし、イエス・キリストが十字架の上で血を流してくださったことによって、その犠牲が完全な形でささげられ、もはや動物の血を繰り返しささげる必要はなくなったと聖書は語ります。イエス・キリストが、全ての人の罪の犠牲として、血を流してくださったことによって、神が私たちの罪を赦してくださるといえることです。

「感謝」という言葉は、聖書の書かれた元の言葉において、「恵み」や「贈り物」という意味を持つ言葉です。神から頂いた恵み、贈り物を持って神に仕えて行こうと言われていました。その神の恵みを持って奉仕する時に、その奉仕は義務感や強制ではなく、感謝となります。神はイエス・キリストの血によって、私たちに揺り動かされることのない御国を贈り物として与えてくださっています。今はまだ信仰の目を持ってしか見ることのできないこの揺り動かされることのない御国に入るその日まで、与えられた恵みを持って、共に神に仕えてまいりたいと思います。